
白騎士物語～魔法少女と騎士たちの目覚め～

ねぎとろどん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白騎士物語〜魔法少女と騎士たちの目覚め〜

【Nコード】

N3204Y

【作者名】

ねぎとろどん

【あらすじ】

死を迎えた青年は、神様の計らいでレナードの後輩、ソード・ホワイトナイトとして『白騎士物語』の世界に転生した。紆余曲折を得て、皇帝マデラスを倒すことに成功するも、マデラスの最後のあがきで時空の穴に落ちてしまう。……そして気が付くと、そこは見知らぬ世界だった……。空を見上げると、満天の星空で交差する紫と金色の光……。さらに、マデラスに吸収されたはずの『アーケ』に異変が！？ねぎとろどんが贈るクロスオーバーファンタジー第一弾、堂々と開幕！

プロローグ〈冒険者の回想〉

オレの名前は、ソード・ホワイトナイト。

現実世界で死を迎えたオレは、生き様を神様に褒められ、『白騎士物語』の世界へアバターとして転生させられた。

神様いわく、「お前にはまだ一つだけ足りないものがある。この物語の中で、それを見つけることができるじやろう」との事……そう言われても、前世の記憶もないからよく分からないけどね……

平和な国である『バルンドール王国』に転生したオレは、ひよんなことからワイン商のラパッチさんに拾われ、彼のワイン商の手伝いをするようになったのだが……

初仕事である城へのワイン搬入……先輩であるレナード、その幼馴染であるユウリと一緒に城にワインを運び込んだ後、「ちょっとだけ舞踏会の雰囲気を楽しんでいこう」というレナードの言葉につられて、城に入り込んでみたのだが……

……その直後、いきなり黒い鎧の軍団が、城に攻め込んできたんだ！

そこから後はとんでもない事の連続だった……謎の老魔法剣士エルドアに助けってもらったり、レナードが古代の戦闘兵器、シンナイトである『白騎士』に変身したりして、なんとかその場を乗り切ることができた。

だが、その戦いで国王のヴァルトス王は殺害されてしまい、王女であるシズナ姫もまた、『ウィザード』と名乗った謎の組織に連れ去られてしまった……

幼いころにシズナ姫と面識があったらしいレナードは、エルドアの言葉に導かれてシズナ姫を救う旅に出ることになった。

当然、オレもそれをほつとくことはできない！冒険で鍛えた我流の剣術を武器に、レナードに付いて行くことにした！

それからは、すごい冒険の数々だった……レナードの『白騎士』と対照的な敵側のシンナイト、『黒騎士』と戦ったり、砂漠の都の『アルバナ』ではカーラ、巨大生物の上に建造された中立自由都市の『グリード』では、シーザーという頼もしい仲間に出会っりました。

シーザーは『白騎士』と同じシンナイトである『竜騎士』の力を手に入れたが、実はカーラは『ウィザード』のスパイで『黒騎士』だったことをオレ達に明かすと、『ウィザード』へと戻っていった……

カーラの裏切りにあったオレ達だったが、それでもオレ達はカーラを信じて戦い続けた。

短い間とはいえ、カーラは苦楽を共にした仲間だったから……なにより、シーザーはカーラを気にしてたみたいだったし……

そして、ついに決戦の舞台である『ドグマホール』へと足を踏み入れたオレ達……その時、エルドアがこの戦いの真実を語った。

この戦いは、はるか昔、シンナイト時代の戦争である『ドグマ戦争』がきっかけだということ……

その昔、魔法国家『アスヴァン』に、武力国家である『イシュレニア帝国』が戦争を仕掛けてきた。

戦いは熾烈しれつを極めたが、アスヴァンに味方した『白騎士』が最強最悪のシンナイト『太陽王』に変身した皇帝マドラスを倒し、戦いは終結した。

だが、その代償に『白騎士』の契約者であるワイルドと、アスヴァンの王女ミューレアスが命を落とした……

しかし、マドラスは邪悪な意思を持ち、遠い未来に復活してミューレアスの生まれ変わりであるシズナ姫を狙うと予言され、エルドアは遙か昔から、禁呪と呼ばれる魔法を使ってこの時代に來たらしい……

……余談だけど、エルドアはその禁呪の代償として老人の姿になっってしまったらしく、心はまだ青年らしい……

その話を聞いたオレ達は、決意を新たにしてドグマホール神殿へと足を踏み入れた！だが、その時にはすでに、『ウイザード』の首領グラールゼルが『太陽王』の封印を解き、オレ達に戦いを挑んできた！

シズナ姫の協力で、なんとか『太陽王』を退けることには成功したけど、その代償に絆を取り戻したカーラが殺され、神殿は崩壊、太陽王も奪われてしまった……

それは、間違いなくオレ達の完全敗北だった……

……そして、それから一年後……

『ウイザード』は『新生イシュレニア帝国』と名前を変え、数々の国を滅ぼし侵略を繰り返していた。

オレ達は、バランドール王に即位したシズナ姫の指揮のもと、まずはフォーリア公国に協力を取り付けるためにフォーリア公国に向かった……

そこで出会ったのは、和平を結ぼうとしていた穏健派筆頭ダラム総裁の娘、ミウとその護衛であるスカーダインと呼ばれる蒼い騎士だった。

ミウとスカーダイン、そして穏健派のみんなの協力を得て、オレ達はフォーリア公国を新生イシュレニア帝国と手を組んでいた過激派の手から解放することに成功する。

その後、自由都市グリードに戻っていたシーザーと再会したオレ達は、グリードを病を振りまくモンスターの手から守ることに成功した。

シーザーを再び仲間に加えたオレ達だが、今度はその矢先にレナードが倒れてしまう。

レナードを治すための薬草を探している途中、オレ達は風の民や

バルンドール王国の騎士団長サイラスと再会。一緒に戦うことを了承してくれた。

そしてさらに、その戦いの中で記憶を取り戻したユウリが最後のシンナイト『月姫』の契約者となり、ついに五体のシンナイトがすべて出揃った！

シンナイトの契約者……レナード、ユウリ、カーラ、シーザー、グラールゼルの五人は、イシュレニア帝国に支持を得たグライブ・レダムがシンナイトを動かすために用意しておきながら、そのまま遺跡ごと封印された子供たちであり、当時は小さいながらも同じ村で育った幼馴染のような存在だったんだ。

その後、オレ達は『太陽王』を倒すための秘策として、かつての『白騎士』が『太陽王』を倒した伝説の剣『ファルシオス』を手に入れるため、スカーダイン達の力を借りて過去の世界へと飛んだ。

そこで、ミウは祖父から、シーザーとサイラスはそれぞれの父から『ファルシオス』の力を封印した『証』を受け継いだ……

さらに、過去での戦いでスカーダインの正体が死んだはずのカーラだったことが分かった。彼女は、一度死んだ後にフォーリアにいる『大賢者ユグラ』の力で生き返っていたのだ。

現代に戻り、シズナ姫の力で三つの『証』を一つに合わせ、『聖剣ファルシオス』を手に入れたオレ達は、とうとうフォーリア帝国、風の民、バルンドール正規軍と協力して『新生イシュレニア帝国』との戦いに挑んだ！

エルドアはこの戦いを『第二次ドグマ戦争』と呼んだ……

『新生イシュレニア帝国』の本拠地である『レッドホーン島』を攻略したオレ達だが、グラーゼルはさらに奥の手を用意していた！

それこそ、巨大移動要塞『ガルマンタ』……グラーゼルは、その力を使って世界を破壊し、自分が世界の王に君臨することをもくろんでいた！

それを止めるために『ガルマンタ』に乗り込んだオレ達は、その最深部でついにグラーゼルとカーラから『黒騎士』の力を奪ったシヤプールと対峙する！

白騎士、竜騎士、月姫VS黒騎士、太陽王の戦いが繰り広げられる中、突然すべての騎士が共鳴し合い、強力な力があふれ出した！

そこに、元バランドール王国の宰相であるサルベインこと、新生イシュレニア帝国のレダム司祭が現れ、自らの野望を口にした。

彼は、エルドアと同じ時代から来た『古人』であり、その目的は五体のシンナイトの共鳴によって皇帝マドラスを復活させることだった！

利用されたことに怒ったグラーゼルだが、すぐにレダム司祭に倒されてしまった……そして、ついにその邪悪な意思が、白騎士の中からあふれ出した！

レナードごと白騎士を飲み込んで、古代の暴君マドラスがついにその姿を現したんだ！

マドラスは、レダム司祭を無造作に葬り去ると、今度はオレ達を

始末しようと思いかかってきた！

シンナイトの力をすべて奪われた絶体絶命の状況……それでも、オレ達はあきらめるわけにはいかない！

レナードを助けるため、今も外で戦っている多くの仲間たちを救うため！オレ達は力を合わせて皇帝マドラスに挑んだ！

そして今、決着の時……

~~~~~?~~~~~

『ハア……ハア……』

禍々しい姿に変わった白騎士が、ボロボロになりながら肩で息をしている。オレ達の攻撃で満身創痍になった、皇帝マドラスその人だ。

『な、なぜだ……この私が、まさか……』

マドラスは、信じられないといったように俺たちを見る。……こ  
っちの戦力ももうボロボロだ……でも！

「これが、最後の一撃だ！」

オレは叫ぶと、剣を構えて走り出す！今まで、幾多の戦いを乗り越えてきたオレの相棒『時空剣クロニクル』を構えて！

「ぶちかませえッ！ソードーッ！」

血まみれになりながらも叫ぶシーザー……手にした槍は穂先が砕けて使い物にならなくなっているけど、それでも目は死んでない！

「ソードッ！セティ兄様の仇をとってくれッ！」

ボロボロのカーラが叫ぶ……セティ、それはグラールゼルの中にいる彼の本当の優しい人格……だが、古代の力に魅せられ誕生した別意識、グラールゼルのせいで、今はもういない……

「今度こそ、ドグマの悪夢を終わらせるのだッ！」

変な方向に曲がっている腕をかばいながら、エルドアが力いつぱい叫ぶ……あいつの時代から続く悪夢、今ここで断ち切る！

「あんな腐った暴君、ぶつとばせーッ！」

ユウリが半分になってしまった弓を杖代わりにして立ちながら叫ぶ……ああ、力の限り全力でぶつとばしてやるよ！

「お願いします……レナードを、救ってください！」

ここまで来たシズナ姫が両手で祈りを捧げるようにしながらつぶやく……まかせとけて、結婚式にはオレも呼んでくれよ！

「うおおおおおーッ！……！」



『おのれ……我が内に取り込んだ騎士たちの力が暴走を始めている……だが、我一人では死なんぞ!』

「くっッ!?!?!」

それを聞いた瞬間、シーザーたちは目を見開き、オレは恐怖に背筋を震わせた。こいつ、まさか!

『ふはははッ!勇敢な冒険者よ!貴様も道連れだ!?!!』

「なにッ……ぐあっ!?!」

その瞬間、クリスタルからすさまじい力があふれ出すと、マドラスの背後の景色が歪み、やがて空間に緑色の穴が開いた!

「あ、あれは……ッ!?!」

『時空の歪みから生まれた次元の穴だ……ここに落ちたら最後、どんな時空のどんな世界のどんな時間の飛ばされるか見当もつかん、それ以前に、体ごと消滅するかもしれんなあ!』

「くっ……!」

「冗談じゃない!オレは手の中であがくが、マドラスがしっかり掴んでるせいでビクともしない!

「ソードッ!」

「待ってる、今助ける!」

「みんな!」

それを見たシーザーたちが、自分たちの武器を構えて走ってくる!だめだ、このままじゃみんな……



五つのアークは、オレを取り囲んで輝き始めた。それは、まるで新しい物語の始まりのように見えた。

『な、なんだ！？ぎ、ぎゃあああああああああああッ  
！……！……！』

「……………」

オレをつかんでいたマドラスが、光に包まれて消えてしまった。そして、オレもその光に飲み込まれた瞬間、目の前が真っ白になった……

？…？つづく…？

## プロローグ〈冒険者の回想〉（後書き）

まずはプロローグです、楽しんでいただけたでしょうか？

この話は、白騎士物語を知らない人のために概要を伝えるものになりました。次回からは、いよいよAs本編に乱入です！

## 第一章 魔法少女、大ピンチ!?

「ん……んん？」

冷たい風が頬を撫でて、オレの目を覚ましてくれた。この風はよく知ってる、夜特有の冷たくもやさしい風だ……

「ん？」

いや、ちょっと待て……オレはどうなったんだ？確か、マドラスと一緒に時空の穴に落ちて、それから……そうだ『アーク』が来て……

「そつだ、アークは!？」

オレは飛び起きて周りを見回してみる。すると、オレの周りに無造作に散らばっているアイテムを見つけた!

白騎士の変身用アークの白いガントレット、竜騎士のベルト、月姫の弓、黒騎士の盾と剣、太陽王の仮面……

「全部ある……」

いや、これがあるのは不思議じゃない……あの時空の中で、オレを守ってくれて、一緒についてきたんだと思う……あくまでオレの推測だけ……

オレはそつと白騎士のアークに触れてみるが、問題なく触れるこ



とができた……普通なら、契約者以外が触れると、拒絶反応を起すはずなのに……

「どうなってるんだ……？」

不可解なことが色々重なって、オレの頭じゃ処理が追いつかない……くそう、エルドアのおっさんがいれば、分かりやすく説明してくれるのに……

「とにかく、このあたりの事調べてみるか……つと、お？」

その時、オレは妙な感覚に気が付いた。自分の体が、なんだかいつもと違うような……なんとなく振り返ってみると、その違和感の正体に気が付いた。

「影が……短い？」

後ろを見ると、そこには光を受けて伸びるオレの影……でも、明らかに小さい！小さすぎる！

着ている物は、間違いなくオレが愛用してた『白竜の法衣』だ……  
……だけど！

「手も体も小さくなって……十歳くらいの子供みたいだ……」

どうなってる？もう何度目かわからない疑問符が、オレの頭の中を駆け抜ける……だが、その時オレは、マドラスの言葉を思い出した。

『この時空に吸い込まれたら最後、どの時空のどの世界のどの時間

に飛ばされるか見当もつかん……それ以前に、体ごと消滅するかもしれんなあ！」

さっきの时空は、時間や体にも影響を与える……つまり、そのせいでオレの体がこんななってしまったと!?

「おいおいおい、一度転生した時にもこういつのあったから驚きはしないけど、いくらなんでも縮みすぎだろ!?!」

ちなみに、レナードたちと旅をした時のオレは十六歳。一気に六歳も若返ってしまいましたよ!

「まいったなあ……まあ、あんま不自由もないし、気にしないでおこっ……」

グチグチ言っても仕方ない!オレは周りに落ちてるアークを拾い集めて道具袋に仕舞い込んだ。

その時……

……ガギンツッ!……ギンツッ!……

「ん?」

かすかにだが、確かに音を聞いた。よく慣れた音だが、どこか少し違う……

「剣と剣を打ち合わせたような音……いやでも……」

音は次第に大きくなっていく……人同士の戦闘でよく聞く、剣と剣をぶつかり合わせたような音だけど、なんか、どこか違和感が……

「この音はどこから……」

キョロキョロと周りを見回すが、そこには誰もいない……いや……

「上か!？」

ほとんど直感だったが、それは的中した!そこでは、紫と金色の二色の光が、何度もぶつかり合いながら交錯していた!

「人が……空を飛んでる……!？」

オレはあまりに不思議なその光景に、思わず叫んでいた。

~~~~~?~~~~~

その声は、私、高町なのはの耳にも届きました。

「えッ!？」

一瞬でしたけど、聞き間違いなんかじゃない!確かに今、誰かの声が……

その時、目の前に透明なスクリーンが映し出されました。誰かからの通信です。

『なのは、聞こえる?』

「うん、大丈夫だよ、ユーノ君」

スクリーンに映ったのは、金髪の優しそうな男の子……半年前、何も知らない小学生だった私に、魔法の力を与えてくれた不思議な男の子、ユーノ・スクライア君です。

『今の声、なのはにも聞こえたよね?』

「うん!男の声が聞こえたよ!」

ユーノ君が真剣な顔で聞いてきたから、私も真剣にうなづきます。やっぱり、聞き間違いじゃなかったんだ!

『どうもこの結界内に、誰かが入り込んだじゃったみたいなんだ!ボクとフェイトとアルフは、この子達の相手動けないから……うわッ!』

「ユーノ君!?!」

突然、画面が揺れてユーノ君が消えました!どうやら、何かに吹っ飛ばされちゃったみたいです!誰も映らなくなった画面から、まだ声が聞こえてきます。

『てめえ、一対一の戦いの最中に通信たぁいい度胸じゃねえか!騎士としては最高の侮辱だぜ!』

『くっ……シールドを力づくで破るなんて……なのは!』

「は、はい!」

ユーノ君の大声にびっくりして、私は思わず正座をしまいました!」

『さつきも言った通り、ボク達は彼女たちの相手で動けない！アースラは指定位置まで来れてないし……君があの子を安全な場所に避難させてくれ！』

「はい、了解しました！」

元氣よく答えて敬礼すると、ユーノ君は笑ったまま通信を切りました。

「急がないと……大丈夫、レイジングハート？」

『もちろん、大丈夫です』

私の手にあるピンク色の杖が答えてくれました。それを聞いて少し笑うと、私は今までいたビルから魔法で空に飛び上がりました。

~~~~~?~~~~~

……半年前、私は何も知らない普通の小学四年生でした。そんな中、私はユーノ君と出会い、魔法の存在を知りました……

私はユーノ君を助きたい一心で魔法少女になり、『ジュエルシード』っていうアイテム集めをしていました。

そんな事件の中、フェイトちゃんと出会い、戦って、つらいこともあったけど……その事件でお友達になったユーノ君、フェイトちゃん、フェイトちゃんの使い魔でオレンジ色のオオカミのアルフさん……みんなと一緒に戦って、事件は一応終わりを迎えました……

そして、普通の小学生として暮らしていた私は……

今日突然、赤い服を着た謎の女の子に襲われて、負けてしまったのです！

だけど、負けてボロボロになった私を助けてくれたのは、半年ぶりに会うお友達、フェイトちゃん、ユーノ君、アルフさんでした！

今、フェイトちゃんとアルフさんは赤い服のこのお仲間さん達とユーノ君は私のケガを治してくれた後、赤い服の女の子と戦っています。

そして、私は……

~~~~~？~~~~~

「うむ、これはまさか……」

上空で戦い続ける二つの光を見ながら、オレは自分の置かれた状況を大体察した……

ここは、バランドール国のあった世界じゃない……多分、もつと文明の発達した異世界なんだろう。

転生した経験があつて助かった……あんまり動揺もなく事態を飲み込めてる自分が、ちよつと怖いけど……

「さて、どうするか……」

『相棒、巨大なエネルギーの歪みを確認！何か来るぜ！』

「えっ………？」

これからどうするかと立ち上がった瞬間、何か機械めいた声が聞こえてきた！しかもかなり近くから……キョロキョロとあたりを見回してみても、誰もいない……

『どこ見てんだ相棒、ここだぜ、ここ！』

「いや、だから「ここ」って言われても……ん？」

よく聞いてみると、声はオレの腰のあたりから聞こえてくる……そこには、いつも一緒にいる相棒の魔法剣クロニクルが……

『よう相棒！気分はどうだい？』

「………は？」

クロニクルの柄の中心にはめ込まれた宝玉が光り、そこから陽気な男の声が飛び出してきた。

………一瞬、オレの頭脳は完全に停止した………そして………

「クロニクルがしゃべったーーーーーッ………!!」

事態を認識した瞬間、オレはこの世界で二度目の絶叫を上げた……

~~~~~?~~~~~

あの男の子がまた何か叫んでいます……どうしたんだろう？まあ、私も魔法に出会ったばかりの頃は、叫びまくっていた気がしないでもないの……

でも、あの男の子変わってるの……

髪の色は遠目からでも分かるくらいきれいな青で、着てる服も白と青を基準にした変わった服……ちょうど、RPGのゲームで神官さんが着てるような服です……

「まるで、ゲームの世界の人みたいなの……」

『なのはちゃん、聞こえる！？』

「ひよえあッ！？」

私が思わずつぶやいていると、目の前に突然、通信用のスクリーンが映し出されました！気が抜けてたから、びっくりした~~~~~……

「な、なんですか、エイミイさん？」

スクリーンに映ったのは、髪の短い女の人でした。名前はエイミイさん、半年前の事件でお世話になった人なの！



「ただ、スクリーンに映ったエイミーさんは次の瞬間とんでもないことを告げてきた！」

『大変だよ！そっちの結界内に、超強烈なエネルギー反応があったの！まるで何かを召喚するような……とにかく、早く一般人を連れてそこから離れて！』

「え、は、はいい！」

エイミーさんの説明は、半分以上よく分からなかったけど、とにかく急いで逃げなきゃダメってことだよな！

「え〜と……そ、そうだ！あの男の子……ふえっ！？」

ゴゴゴゴゴゴゴッ！……！！

通信を切った瞬間、結界内にすごい衝撃が走りました！まるで、空間そのものが揺れているような……

「な、なに！？」

『マスター、魔力反応上昇！何か出てきます！』

「ッ！？」

バライイイイイインツ！！！！

レイジングハートから告げられた次の瞬間、空の一部がガラスみ

たいに割れて、その中の緑色の空間から、何かが降りてきました……

それは、とてもへんてこな姿でした……

蒼いおつきな人の顔の上に、小さな人の顔が生えていて、背中には羽、両側には腕の代わりみたいに動き回る変な柱……

こつちも、まるでRPGのゲームに出てくるモンスターみたいですよ。でも、私には分かりません。いえ、今はモンスターの出現で動きを止めている、フェイトちゃんも、アルフさんも、ユーノ君も、さつきの赤い女の子や、そのお仲間さん達も……みんな分かっているはずですよ……

それが、とっても危ないものだってことッ！……

『うそ……魔力値SS+!?それにこの反応は……みんな、逃げてえッ！……!』

「『』つ……!」

エイミイさんの声で、私たちは一斉に動こうとしました!なんでもか分からないけど、頭や胸の奥にある何かが、逃げろって言うてる気がするの!

でも、それは遅かった……

そのモンスターさんの羽が光った瞬間、確かに私はこんな言葉を聞きました……

……メテオ・ブレイク……

ドガアアアアアアアアアアアアアアアアアンツ!!!!!!!!!!

その瞬間、空に開いた大きな穴から、たくさんの隕石が私を……いえ、そこにいたみんなを襲いました……

そして私は、体がちぎれ飛びそうな衝撃と、目も開けていられなような光に包まれて、気を失ってしまったのです……

（つづく）

## 第一章 魔法少女、大ピンチ！？（後書き）

第一章です、主人公、介入してません！でもモンスターは介入しました！

ちなみに、モンスターは白騎士物語に登場するモンスター、魔像王ベヒモスです！

今回は、ついにシンナイトが登場します！お楽しみに！

## 第二章 ヴォルケンリッター、その名に懸けて！

「うっ……くう……」

目を覚ました私は、ガレキをどかしながら立ち上がった……見上げると、さっきとんでもない攻撃をしてきた見たこともないモンスターがどこかのビルの上に浮かんでいる。

「ちつくしょう、なんなんだよあれ……」

「……ぐぬっ……」

声に振り返ると、赤い服を着た少女と筋肉質な大男が立っていた。二人とも、私の信頼する仲間だ。

「ヴィータ、ザフィーラ……無事だったか……」

「おう、まーな……」

「なんとか、だがな……」

大男、ザフィーラが無表情で答えた。二人とも、さっきの攻撃をくらったせいでボロボロだ。

「……まあ、私も同じような状態ではあるがな……」

『みんな、大丈夫！？』

「ああ、シャマルか……」

頭の中に、知った声が響いてきた……バックアップを得意とする我が仲間、シヤマルだ……

「こちら何とか全員無事だ……それよりも、あの魔物の事は何か分かるか？」

『うっん、とんでもない魔力を持っていることくらいよ……多分、この世界の魔物じゃないんじゃないかしら……』

「なるほど、な……」

シヤマルが言う「この世界」というのは、この地球だけではなく、管理局が管理する『次元世界』すべてということだろう……なるほど、未知の世界の魔物ということか……

「なあ、シヤマル……あいつってリンカーコア持ってるのか？」

『うっん、その反応はないわ……残念だけどね……』

「そっか……」

ヴィータの質問に、シヤマルが肩をすくめるように答える。

『リンカーコア』……魔法を使う者が体内に宿す特殊な器官……その収集こそが、我らの目的……

「それならば、戦うだけ無駄……と、言いたいところだが……」

私は周りを見回しながらつぶやく……さっきの一撃だけで、この辺り一面が焼け野原になってしまった……ヴィータの結界の上に張

られた結界のおかげで、現実世界への被害は免れているが、もしこれが外に出たら……

「これが外に出たら、海鳴市そのものが吹き飛ばな……」

「それじゃあッ!？」

「……主にも、危険が及ぶだろうな……」

驚いて声を上げるヴィータに、ザフィーラが顔をしかめたまま答える。

そう……そうならば、この海鳴市に住む我が主まで危険にさらされることになる。かりに逃げおおせたとしても、心優しい主は泣いてしまうだろう……

主に涙を流させては、意味がない……そして!

「我らベルカの騎士に後退の文字はない!」

「おう!絶対守るんだ!あたし達に大切な時間をくれた、あの笑顔を!」

「……盾の守護獣の名に懸けて、主の危険は排除する!」

『私は結界内に入れないから、バックアップしかできないけど……みんな、必ず勝って帰りましょう!』

「」「おうッ!……!」「」

我らはそれぞれのデバイスを手に立ち上がる。……騎士の名に懸けて、主とこの街を、守ってみせる!

「闇の書の守護騎士、ヴォルケンリッターが烈火の将……シグナム、参る！」

「同じく鉄槌の騎士ヴィータ！いくぜえ！」

「盾の守護獣ザフィーラ！いざッ！」

私が名乗りを上げながら空へ飛び出すと、ヴィータとザフィーラも同じように飛び上がった！

……必ずあれを倒す……我が主と、主が愛するこの街を守るために……

我ら、ヴォルケンリッターの名に懸けて！

~~~~~?~~~~~

……え〜と、どうなったんだ？

クロニクルがしゃべったことに驚いて固まっていたオレは、あのモンスターの出現に気づくのが遅れた……

結果、その攻撃への対応が遅れたけど、クロニクルが突然『ホワイトフライ』って叫んだ瞬間、オレの靴に青い羽が生え、オレの体は空中に飛び上がって攻撃をくらわずに済んだ……でも……

「あ〜、死ぬかと思った……」

現在、オレは空を飛ぶ感覚をつかむことができず、空中で逆さまなまま浮いている……これ、一体どうすればいいんだ？

……というか……

「あれって、ベヒモスだよな……？」

オレは塔みたいな建物の上で自分の眷属である土の精霊『グノーム』を生み出し続けてるモンスターを見ながらつぶやいた。

オレの世界にいたモンスター『魔像王ベヒモス』……土の精霊が進化した姿で、グノーム達の親玉だ。

その魔法の威力はすさまじく、前に一度戦った時も、危うくやられそうになったのを覚えている。

「なんでこの世界にいるんだ……っと！」

オレは浮いてる足を軸に『くるっ』と回転して、何とか立ち上がることができた。なんかあれだ、水に浮く靴を履いて海の上に立ってる感じだ……

『器用だな、相棒』

「おう、クロニクルか」

オレの腰に引っ付いてる剣が呆れたようにつぶやいたのを聞いて、オレは笑って返す。すると、クロニクルは意外そうに返してきた。

『もうオレがしゃべることには驚かないのか？他にもベヒモスの事とか、あの女の子たちの事とか……』
「ん、後で聞くよ。お前は全部知ってるんだろ？だったら焦ることはないさ」

ていうか、女の子たちって誰の事だ？あの光ってたのは遠すぎてよく分からなかったし……

『チエ、つまらねえな……』

「なんか言ったか？」

『イエイエ、ナニモイツテナイデスヨ？』

……こいつ、意外と性格悪いな……

「まあ、まずはあいつを何としないとな……」

オレはそう言ってベヒモスを見た。あれをそのまま放っておいたら、それこそ町が丸ごと消滅しちまう！

問題は、どうやって倒すかだ……前の時は、白騎士に変身したレナードが一刀両断してなんとかなったけど、今回はオレ一人……とても個人で勝てる相手じゃない……

「せめて、オレも変身できたらな……ん？」

そうつぶやいた瞬間、オレはベヒモスに向かっていく一団を見つけた。

一人はピンク色の髪をポニーテールにした女性、一人は赤いドレ

スを着た女の子、最後は手甲を付けた大柄な男だ……

何をする気だ？……まさか！？

ドガアアアアアアアンツ！！！！

次の瞬間、予感確信へと変わった……

なんと三人は、各々の武器を使ってベヒモスの周りにいるグノーム達と戦闘を始めたのだ！

「……つたく、なにやってんだ！大元のベヒモスを倒さないと、グノームはいくらでも出てくるってのに……！」

『おいおい相棒、この世界は相棒のいた世界とは違う世界なんだぜ？あいつの生態や戦い方なんて、誰も知らねえよ』

「そう、だよな……でも！」

……オレは知ってる……！

その瞬間、オレは地面に降りてベヒモスの方に駆け出していた！オレには、まだ出来ることがある！

……まあ、空を飛ぶなんて芸当はまだ無理だけどな……

だが、その時……

ドクン

「なっ……」

心臓が跳ね上がるような感覚に襲われて、オレは足を止めた……
いや、まるで足を縫い付けられたみたいにな動けなくなった……

力を求めるか？

頭の中に声が響く、これは一体……

この世界で、マスターがいない……ならば、新たなマスターを探すのみ

マスター？何のことだ？一体何が起こって……

マスターと共に戦い抜いた戦士よ！お前に騎士の資格があるかどうか、証明して見せよ！

ちょ、まっ……

反論する暇もなく、オレの意識は暗闇の中に沈んだ……

~~~~~

「こつのお！邪魔すんじゃねえ！」

あたしは相棒のハンマー型デバイス『グラーファイゼン』で、茶色い魚もどきを吹っ飛ばしながら叫んだ！吹っ飛ばした奴らはすぐに消えちまったけど……

「チツ！次から次にぞろぞろと！」

すぐに次の奴が、後ろのでっかいのから出てきやがる！これじゃあキリがねえ！

「なあ、シグナム！やっぱ後ろの奴たたかねえとダメだぜこりあ！」  
「分かっている！」

シグナムが珍しく焦ったように言い返してくる。シグナムは剣型デバイス『レヴァンティン』で魚もどきを斬ってくけど、まったく数が減らねーッ！

「これでは、本体へ向かうことができません！」

周囲の魚どもを殴り飛ばしてるザフィーラの声にも、焦りが混じってるのがわかる……っていつか、あいつのまともな声聞いたのいつぶりだ？

「しかし、これじゃあ本当にジリ貧だ！……ん？」

その時、あたしの視界の端に何か映った……そっちを見てみると、

どっから迷い込んだのか、子供が一人で佇んでいた……

でも、そいつはただの子供じゃなかった……

「……なんだ、あいつ……」

そいつからあふれてる蒼い魔力……まるで、誇り高い騎士のよう  
なその魔力に、あたしの中の『何か』が惹きつけられた……

「どうした、ヴィータ……あれは……」

「むっ……?」

シグナムとザフィーラも、魚もどきを斬り払いながらそいつに目  
を向けて動きを止めた……

胸の奥から、何かがこみ上げてくる……まるで、何かに惹きつけ  
られるかのように、あたしたちは戦闘をやめて、そいつのそばへと  
舞い降りた……

そしてその瞬間、そいつは目を開いた

( つづく )

## 第二章 ヴォルケンリッター、その名に懸けて！（後書き）

シンナイトを登場させ……られませんでした！ごめんなさい！

いやあ、小説って難しいですね……皆さんに楽しんでもらえたら、幸いです。

では、次回こそシンナイト登場します！させます！させてみせます！なので楽しみに待っていてください！

感想、お待ちしております！ではまた！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3204y/>

---

白騎士物語～魔法少女と騎士たちの目覚め～

2011年11月8日05時05分発行